

(2023年12月6日配信)

NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」12月12日(火)4時台

「戦争体験を遺す・ビデオ交流20年」

神 直子 NPO 法人ブリッジ・フォー・ピース代表

きき手:坂口憲一郎

神直子さんは、大学4年の時参加した、フィリピン体験学習での出来事が、忘れられません。体験学習とは、戦争を知らない若者たちが、太平洋戦争の戦地、フィリピンで、戦争の実情を学ぶというものでした。現地の人達の証言は心に深く残り、戦後世代の自分に、何ができるだろうと思ひ悩みます。そして気づいたことは、戦争は、被害者だけでなく、加害者の日本兵にも深い心の傷を残しているということでした。始めたのは、日本兵の苦しみをフィリピンの人達に知っていただくという活動でした。ビデオ収録した証言は、、、300人以上。「私の命は、あとわずか。でもビデオ証言は、100年、200年残ります。」という元日本兵。2025年は、戦後80年。忘れられようとしている戦争の記憶。20年以上、フィリピンの人達と交流を続ける神直子さんのお話です。

「備前焼祭りと鎮魂の歌とハソウ」 坂口 憲一郎 (2016/11 記)

YOU TUBE : <https://youtu.be/EgR04TMw8S0>

10月16日(日)備前焼祭りが、備前焼の里、岡山県備前市伊部(いんべ)で開かれた。今年、34回を迎えた祭りには、毎年、全国から備前焼の愛好家が集まる。備前焼は、1000年の伝統を誇る日本古来の焼き物だ。日本の伝統的な焼き物は、備前、瀬戸、丹波、常滑、信楽、越前の6か所あり、六古窯といわれる。中でも備前・伊部は、安土桃山の頃は、大規模な陶器生産地で、全国の水がめの80%を占めたといわれるほどの大産地だった。備前の水がめは、水質保持がよく、水を腐らせないといわれる。この備前焼のルーツが、須恵器(すえき)といわれる焼き物。須恵器は、およそ1500年前、中国から日本に新たな焼き物技術として伝えられた。それまでの野天で焼かれた素焼きと違い、丈夫で質が良く、使いやすいことから壺や甕、皿など様々な生活用具が生み出された。その中に、不思議な形の壺、、、ハソウがあった。主に西日本の古墳から発掘され、何に使ったのかは諸説あるが、考古学上は、酒器とされている。

ハソウには胴の所に穴があり、息を吹き込むと、ほら貝の様な音をする事から笛壺という見方もある。ハソウは、その昔、法要に使っていたと伝えられているのが1300年の伝統を持つ奈良市にある不退寺(ふたいじ)。花の寺でも知られ、歌人で伊勢物語の主人公、在原業平を祀る寺。毎年5月28日には、業平忌が行われている。今から18年前、この不退寺で、ハソウの音色を響かせ、業平忌法要が行われた。

須恵器のハソウを再現したのが備前焼の陶芸家好本宗峯さん。不退寺から依頼されたハソウ法要に参加した好本さんを中心とした、ハソウ吹きは、メロディーを作り、吹き方を練習し、作務衣で衣装を統一し、境内から寺の本堂内まで練り歩き、厳かで不思議な雰囲気醸し出した。祀られている霊を慰めたのではないかと思う。その後、あまりハソウを吹くことはなかったが、東日本大震災後、2012年、縁あって、岩手県大船渡市の市民会館大ホールで、ハソウを吹く機会があった。これまで、靖国神社や引退した盲導犬の支援コンサートなどで

も吹かせてもらっている。今回の「鎮魂の歌」とのジョイントは、コカリナ演奏の音色も入り、しかもオーケストラバージョンで、とても厚みのある歌声になった。ハソウが、これから「鎮魂の歌」とともに「鎮魂の笛壺」として、その音色が人々の心に、、、古の人々が平安を願ったように、、、しみこんでいてほしいものだと夢見ています。

